Dagens Nyheter

ＮＩに於ける日本の木の芸術

1981 年 6 月 4 日

ヨーロッパあるいはアメリカ出身でない芸術家で、今仮に西洋現代美術呼びならわしているものに繋がる彫刻絵画を行っている者は直ぐに彼等の祖国を離れて活動的な世界へと飛び出していく。
無理もない話で、大概の場合、彼らの国には、現代美術が充分機能するのに見合う下地がないからである。
私の言っている国とは、多くはすでに既存のシステムに組み込まれている独自の文化的蓄積を持っている国であり、そこには当然、彼等の考えお互いに交し合う仲間があまりいないのである。
普通、今例えば第三世界の何処かで我々が言う現代美術に通ずるものを制作している天才がいるなどとは考えにくいものであり、それも充分頷けることである。
境界線上にある奇妙な例は日本である。
日本はもうこれ以上出来ない程までに分裂しており、東洋的伝統と西洋近代主義が文化の全層に亘って入り乱れている。
それ程名のある芸術家は出現していないし、最も重要な日本の芸術家河原温はもう 20 年もニューヨークに住んでいる。
しかし、ここにもやはり例外がある。その一人が角永和夫である。
彼の作品は今、“NI”で見ることが出来る。この画廊はこの夏、西洋の伝統に繋がる日本の芸術家達に焦点をあてようとしているが、彼らの大半はヨーロッパに住んでいる。
角永は日本に住み、日本語しか話さず、その相反する二つの伝統の種々の相を秘めた作品を携え突如やってきた。
その作品はかなり興味を惹くものである。製材所の息子として育った角永は、素材、またその素材の扱いとも自家薬籠中の物としており、それは彼の幹を使った仕事振りにも？える。
その際、彼は誰にも思いつかないようなことを試みており、その成果は瞠目に値する。
彼のしていることは簡単に云えばこうである。
つまり、種々の方法で幹を文字道り解倍し、しかもその部分が、それでも元の全体としてとどまっているようになっているのである。
例えば、彼は 4m ものナタで幹を（幹の一部とは云っても大変な大きさのものであるが）何十回も縦に最後まで切ってゆく、大変忍耐のいる仕事であり、瞑想的、東洋的要素が強く感じられる。
ここでは死んだ木が問題となっており、木はもはや木そのものでなく、特別の意味をなしている。
その作品（物は）木でもなく、材木でもなく、又、作業台でもない中間のものである。
その他、彼は竹の輪を切った幹にかけたり、木を謂わば剥いでいったり、木の部分が互いに別れるよう深く切り込んだりしている。
手仕事としては全く驚くべきことであり、それに加え、単調に繰り返された行為の過程へと意識を自然に向かわせ、瞑想を誘う様なその作品の特質は単なる小手先の技巧をはるかに越えた意味を持っている。
死と生、自然と文化、といったものを連想させることは言うまでもない。

フィリップ・ペータース